



## 日本統治時代台湾米・塩の生産と海外輸出の研究 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	林 敏容
発行年	2013-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第497号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9350">http://hdl.handle.net/10112/9350</a>

[3]

氏名	林 敏 容
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	文博第 209 号
学位授与の日付	平成 25 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	日本統治時代台湾米・塩の生産と海外輸出の研究
論文審査委員	主査教授 松 浦 章 副査教授 内 田 慶 市 副査教授 藤 田 高 夫

## 論文内容の要旨

林敏容氏の提出された博士論文「日本統治時代台湾米・塩の生産と海外輸出の研究」は、日本統治時代の台湾において米や塩がどのように生産され、台湾から輸出されたかを考察したものである。とりわけ台湾米の日本各地への輸出と、台湾塩の東アジアの日本や朝鮮、北アジアのロシア領沿海州、樺太さらに香港、厦門そして東南アジアのフィリピン、英領北ボルネオなどの国々、諸地域へ輸出された状況等を解明したものである。

博士論文は次のように構成されている。

### 序論

#### 第一部 日本統治時代台湾米の生産と海外輸出

##### 第一章 1895 年以前の台湾米の生産と海外輸出—その歴史的考察

##### 第二章 台湾米生産近代化の基礎

##### 第三章 台湾米の生産

##### 第四章 台湾米の海外輸出

#### 第二部 日本統治時代台湾塩の生産と海外輸出

##### 第一章 1895 年以前の台湾塩の生産と唐塩の輸入—その歴史的考察

##### 第二章 台湾塩の生産と島内販売

##### 第三章 台湾塩の海外輸出

### 結論

### 参考文献

### 初出一覧

序論は、研究動機と目的、先行研究の考察、研究の方法と史料、論文の構成からなる。本博士論文の課題を鮮明に述べている。

第一部「日本統治時代台湾米の生産と海外輸出」は 4 章からなる。

第一章「1895 年以前の台湾米の生産と海外輸出—その歴史的考察」は、台湾で生産された早期台湾米の生産状況と早期台湾米の海外輸出の事情を述べる。

第二章「台湾米生産近代化の基礎」は、土地調査、農田水利の建設、稲作の改良、農業教育の遂行など日本の台湾統治による農業改良の進行過程を叙述している。

第三章「台湾米の生産」は、台湾における農業人口と稲作面積、台湾米生産の条件と状況などについて台湾の農業生産の実情を丹念に究明した。

第四章「台湾米の海外輸出」は、台湾において生産された米穀が日本市場にどのように需要されたかを考察し、台湾米の対日輸出の推移を概観するとともに具体的に関東地方や関西地方そして沖縄への輸出の状況を明らかにしている。

第二部「日本統治時代台湾塩の生産と海外輸出」は3章から構成されている。

第一章「1895年以前の台湾塩の生産と唐塩の輸入—その歴史的考察」は、台湾が1684年以降において清朝支配に入り、福建省の一部となり、中国の伝統的な塩の専売制度のもとで台湾塩がどのようなであったかを叙述し、当時の台湾塩の生産と大陸からの移入される塩いわゆる「唐塩」の問題を考察している。

第二章「台湾塩の生産と島内販売」は、日本の台湾統治によって台湾塩がどのように生産され、台湾島内においてどのように販売されていたかを究明している。

第三章「台湾塩の海外輸出」は、日本の台湾統治時代に台湾で生産された塩が、日本のみならず、日本の統治下にあった朝鮮へ輸出されていた状況や、さらにロシア領の沿海州や樺太へも輸出されたのみならず香港、厦門そしてフィリピン、英領北ボルネオへも輸出されていたことを究明した。

結論は、序論を含め二部構成で全8章にわたって叙述した論文の結論を述べる。そして日本統治時代における台湾米と塩の生産と海外輸出の考察の結果、多様な産業、文化の諸相の相関関係により台湾米と塩の増産が進展し、海外への輸出販路の拡大という文化交渉の過程が明らかになったとする。

## 論文審査結果の要旨

日本の台湾統治は1895年から1945年まで約50年に及んだ。これは台湾の歴史が史書に記録され始めた中国の明末清初の17世紀中頃から見れば8分1の時間を占め、その台湾史の中でも急速な発展を遂げた時代であったとの視点から本論文が叙述されている。

これまで日本の台湾統治時代の台湾作物の生産と輸出に関する著名な業績として林満紅氏の『茶・糖・樟脳業與臺灣之社会経済変遷（1860～1895）』（1997年）がある。林氏は、清朝統治下において対外開港した台湾が、世界市場に参入した時代の商品作物であった茶葉、砂糖、樟脳を取り上げ、日本の台湾統治が開始される以前の状況を明らかにした成果であり、現在も高い評価を得ている。

これに対して林敏容氏は、台湾では普遍的に流通していることから看過されてきた米穀と海塩に着目し、日本の台湾統治との関連性で究明したところに本論文の特徴があると言えるであろう。

しかし、これまでの台湾史研究では伝統的な中国経済史研究の一部として台湾米穀の生産と流通や中国の伝統的な専売制度の一環としての製塩と専賣塩が取り上げられてきたが、本論文のように東アジア海域を含んだ物流の視点で考察された研究は皆無であった。さらに台湾の日本統治時代の農業問題や台湾米・塩の生産状況に関する研究はあまり重視され

ていない。特に、台湾米・塩の海外輸出の研究はほとんど進んでいない。

そこで次に本論文が明らかにした諸内容について簡略ながら述べたい。

第一部の4章において、日本の台湾統治は台湾の農業史に大きな変革をもたらした時代とし、とりわけ第四代台湾総督児玉源太郎や民政長官後藤新平が、20世紀初期から台湾農業の近代化の基礎事業を推進し、肥料の施用の促進、農業機械の使用と土地改良を行った結果、これらの政策と変革は台湾の伝統的な農業形態を改革し、台湾米の生産量と品質が向上したことを明らかにした。そして台湾産の米穀は、1900年から1930年頃まで在来米種が主な稲米品種として生産され、大量に日本へ移出されていたが、1922年に日本人による新品種「蓬莱米」が開発され、1929年には蓬莱米の新品種「台中65号」が開発されると、1934年から1939年までは台湾米の生産の黄金時期とも言える時代を現出し、1939年5月に台湾総督府が「台湾米穀移出管理令」を發布したことで、台湾米の生産と移出は急激に減少したことなどを明らかにした。また台湾米が大量に日本へ移出されたのは、日露戦争時期と1918年夏の「米騒動」の時期であり、主な仕向地は関東地方と関西地方であった。1930年代の関東京浜地方における10年間の移入量は、全国移入量の43.65%を占め、関西地方よりも21.65%も凌駕し、沖縄米穀市場も台湾米の重要な供給地であったなど多くの新知見を提示したのである。

第二部では、台湾総督府は1899年に食塩専売制を実施し、台湾塩田の開設と塩の大量生産を奨励したことで、塩田面積は、1899年の面積から1943年には約16倍に増加し、そこでの製塩は、一般塩田1に対し工業用塩田が約1.5であった。これらの製塩は日本国内の食塩のみならずソーダ化学工業等の発展を支えたことを明らかにした。

台湾塩が、1900年に日本にはじめて移出され、その後、第一次世界大戦時期になると台湾塩は大量に日本へ流入し、さらに1937年に日中戦争が勃発すると日本国内での工業用塩の需要が急増し、日本企業は台湾南部に次々と製塩会社を設け塩の生産を拡大し、朝鮮半島や香港にも食塩として輸出され、北洋、南洋漁業の漁業用塩の需要を満たすためにも台湾塩が輸出されたことなど綿密な考証によって初めて明らかにしたと言えるであろう。

さらに本論文の特徴の一つは、各章において多用されている「表」や「図」である。本論文で使用された表は、第一部だけで、合計49表、第二部は合計32表であり、生産量などの数値を表示することで読者に理解しやすくし、また表目次までも丁寧を作成するなど配慮の行き届いた博士論文であることも林敏容氏の人柄の一端として高く表したい。

林敏容氏の27万字からなる本論文は、導入部分の立論の設定に関する叙述が、十分に論じられたとは言いがたい点があるが、本論文で使用された膨大な統計資料は、国会図書館、農林水産省関係機関の図書館や台湾の国立中央図書館、台湾文献館、台湾総督府の旧文書を所蔵する台湾文献館などの資料を博搜して作成された努力の結晶と言える。この結果、本論文は文化交渉学のみならず台湾史研究の領域に新知見を提示した傑作と言えるであろう。中国語に翻訳され台湾の研究者に裨益されることを希求するものである。

林敏容氏は本論文を作成するに当たり、査読のある学会誌に3本、研究雑誌に3本ならびに中国語で4本の論文を発表し、国際学会でも複数回にわたり発表するなど多くの業績を上梓し、専門学会でも高い評価を得ている。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。